

「すいません、ここはどこなんやろね?。」

友達の家から帰る途中、少し寒くなつてリュックの中のジャンパーを取り出し出している私に、あなたは声をかけてきたね。

「ちよつと日なたぼつこにつて外に出たら、分からなくなつちやつて、いやあねえ。」

そう言つて笑つたあなたは、ブルーの薄いパジャマにベージュのカーディガンを一枚、真っ白な髪の毛のせいもあるかもしれないけれど、肌まで真っ白に見えて、とても寒そうだった。

「ここは緑ヶ丘です。おばあちゃんのお家の住所、分かりますか?」

私の言葉にあなたは、ペロツと舌を出し自分の頭をポンツと叩いて、

「私の頭どうしたのかねえ、分からないのよ。呼び止めてごめんね、ありがとう。」

そう言つて、子供みたいに笑い、杖をつきながらゆっくり方向を変え歩き出した。私は慌てて杖を持つおばあちゃんの手を握つた。凍えるように冷めたい手に驚いた。

「おばあちゃん、私も一緒に探す!」

とつさに私は言つていた。かばんから出したジャンパーをおばあちゃんに着せ、背中をたくさん摩つた。これがあなたと私の出会いだつたね。五分くらい歩くと近所のおばあちゃんが、私達を見つけて家を教えてくれた。名前はしずえさんといって、一人暮らしで、最近痴呆症がでてきたかもしれないということも、加えて教えてくれた。家の中に入ったあなたは、とてもうれしそうに、

「ほら、あなたも入つて、ありがとねえ。ほんとに助かつたわあ。お名前は?。」

今度は逆に、あなたが私の手をギュツと握つて、私を中に入れお茶を出してくれた。それから色々な話をしたね。娘さんが遠くの県にいることや一人ぼっちで淋しいこと。私も部活で、試合に全く勝てないことや、友達のこと、家族のこと。なぜだか分からないけれど、一杯話せた。帰りには、しずちゃん、かずちゃんの仲になつていたね。帰ろうと席を立った私に、しずちゃんは、「かずちゃん、今日はありがとね。こんなに人と話したの久しぶり。楽しかつたわあ。よかつたらまた来てちょうだい。」

にっこり笑つて、私の手をギュツと握つた。

「寂しいよお、行かないで。」

しずちゃんの顔は笑っているのに、手はとってもあつたかいのに、なぜだろう、私にはしずちゃんがそう叫んでいるように聞こえた。

「また来るよ。約束。」

そう言つて、私はしずちゃんの小指をとり、指切りげんまんをした。しずちゃんの目にはたくさんの涙が溜まっていた。それからは、部活のない晴れた日には決まって散歩に行ったね。公園でブランコに乗ったり、落ち葉を拾ったり。真っ赤な紅葉の葉、すごく喜んでいたね。しずちゃん

はよく、

「私も羽根がほしいわ。足が痛いから、かずちゃんの試合見に行けないのが残念。一度でいいか

ら、かずちゃんの剣道姿、見てみたいわ。」
そう言って、空を飛ぶ鳥をじっと見つめていたね。いつもかずちゃんは私を応援してくれた。一勝もできなかった時も、

「大丈夫。次は勝てる。大丈夫、大丈夫。」

そう言って私の背中を摩ってくれた。その手がとても温かくて、私はホッとできたんだ。ずっと、ずっと続くと思っていた、この日々が。段々部活も勉強も忙しくなり、一週間に一回は必ず行っていたのに、十日に一回になり、一ヶ月に一回になり、ある時私が帰ろうとすると、かずちゃんは、

「かずちゃん、また来てね。約束ね。」
と、言って小指を出した。

「うん、また来るよ、約束。」

私はそう言って、あの時と同じように指切りげんまんをした。かずちゃんはにっこり笑った。でも段々と同じ年の友達と遊ぶ方が楽しくなり、かずちゃんの家には行かなくなった。五ヶ月くらい過ぎ、私は二年生になった。久しぶりにしずちゃんの家へ行くと、「貸家」と看板が出ていた。近所のおばさんが、痴呆症がひどくなり、娘さん夫婦と一緒に暮らすことになって引越していたと教えてくれた。私は涙が止まらなかった。あの最後の日、指切りげんまんをした、しずちゃんの手が震えていたこと、しずちゃん的笑顔が淋しそうだったこと、ほんとはちゃんと気付いていたのに、私は見ないふりをしたんだ。拭っても拭っても涙は止まらなかった。

私は今、作業療法士になろうと頑張っています。あの時、私にもっと知識があり、手先を使う折り紙や、痛む足のマッサージができていたら、しずちゃんがほしがっていた「羽」をあげたんじゃないかなと思ったからです。そして今度こそ、裏切ることなく困っている人の手をずっと握り、傍で支えていこうと、心に決めたからです。いつの日かしずちゃんに会いたい。そして「ごめんなさい」を伝え、「またね」の指切りげんまんをしたいです。